

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

令和二年二月一日(土曜日) 午後二時三十分開演

演目解説 杉山欣也(金沢大学人間社会研究域教授)

狂言 二九十八(にくじゆうはち)

清水の観音にお祈りをして妻を授かることを申し妻と言います。参詣した男にも夢のお告げがあり、西門の一の階には衣を被いた女がたたずんでいます。女は男の問いに歌で答え、住所は室町春日町と知れます。男が角から何軒目かと歌で問うと、女は「にく」とだけ答えて立ち去ります。九九の二九十八軒目と見当をつけた男が女の家を尋ね当て、女の手を引いて男の家へ伴います。ここまで男の婚活は順調に推移しますが、その幸せな気分が、男の家に着いて女の被衣を取ったときに吹き飛びます。

能 半部(はしとみ)

都北山紫野は雲林院の住僧(ワキ)が、一夏安居(ひと夏の間、座禅修行すること)終わる頃、立て続けた花の供養を行い草木国土悉皆成仏と唱えています。そこへ、集めた花々の中から白い花が微笑むかに見えて、一人の女(前シテ)が現れます。女はたそがれ時と言えば夕顔の花、花の主は生前五条あたりに住んでいたと答えて、夕顔の花を面影に立花の陰に隠れます(中入)。女の言葉に従って僧が五条あたりに来てみると、夕顔の昔の住まいはそのまま、戸口は草に閉ざされ、窓から夕日が差し込んですぐに消えます。東の窓の外には澄んだ月が空に掛かり、垣根越しの山の秋は心にしみて物寂しいことです。弔いを約束した僧の前に、草葉の覆う半部を押し開け、夕顔(後シテ)が花の姿を現して出ます。夕顔は光源氏との契りの初めを思い返し、自身ついの宿りと呼ぶこの五条の家で、夕顔の花の縁で結ばれたうれしさを述べます。夕顔は光源氏の返歌、「花の夕顔」を反芻しながら舞い、僧に弔いを頼んで半部の中に消え入ります。

(西村 聡)

前シテ(里女) 鬘をつけ、鬘帯をしめ、増又は小面の面をかける。摺箔を着附に着、上に唐織を着る。(持物、扇)
後シテ(夕顔) 鬘をつけ、鬘帯をしめ、増又は小面の面をかける。摺箔を着附に着、色大口をはき、腰帯をしめ、上に長絹を着る。(持物、扇)

(午後四時四十分頃終了予定)